

## 映像の中の戦争

三十二回 山田 明

私は戦後昭和二十三年生まれのいわゆる団塊の世代で、戦争体験はない。ここで言う戦争とは太平洋戦争を示す。私の父親は入隊経験があるが、戦争体験の話は一切聞いたことがない。

私と戦争との接点は幼いころ見た映画の中での出会である。伴淳三郎と花菱アチャコの「二等兵物語」という映画を小学校低学年のころ見た記憶が、戦争のけだるさを皮膚感覚で感じた最初であった。新米の二等兵の伴淳が古参の上等兵からいじめられ、鼻から血を流す場面は、軍隊の理不尽さと今自分が平和の中で暮らしている安堵感で複雑な印象であった。その後、勝新太郎の「兵隊やくざ」などもあったが、いずれも娯楽の中に「反戦」というモチーフが入っていた。

中学三年生くらいだったと思うが、五味川純平の「人間の条件」を見た。それは映画ではなく、テレビドラマで、主人公梶には加藤剛、その妻美千子は藤由紀子であった。戦時中、満鉄に勤めていたエリートである主人公が中国人と日本軍との間で葛藤し、最後は満州の土饅頭になる物語である。梶の信念を曲げない生き方と、それを慕う妻美千子の美貌に青春期の胸は

身で、その当時は卒業して疎開しており運よく免れたが、自分と何か接点があると思うと読んでいても力が入り自然と感情移入されてくる。

戦後七〇年になろうとして、戦争体験者はどんどん減っていくが、映像や文章で戦争の悲惨さを残してほしい気持ちはあるが、創る側の論理で違った方向に持って行かれるのが恐ろしい。自分は今六六歳になるが、青春時代に感じた映像や書籍は人から与えられたものであり、考えるきっかけを作ってくれた教師だと思っているが、最後は自分で判断する年齢になった。

先日、ハワイのパールハーバーを見学した。壁一面に張られた写真や轟音が鳴り響く映像、海に沈んだままの戦艦ミズーリ号、それら全てが浮沈の空母であったアメリカ合衆国の七四年たった今でも忘れられない恨みである。だが、私たち日本人を見て恨んでいるようには見えなかったのは、こちらの勝手な思いなのだろうか。他の親日的な東南アジアの国々に行っても同じなのだろうか。考えることは多い。

大いに鳴動したものである。全二十六週のうち十三週くらいだったと思うが、入隊している梶に美千子が面会に行く場面がある。「最後に君の体を僕の目に焼き付けておきたい」と言つて美千子が梶の前で裸体になる場面が、どんなエロ映画よりも官能的で、なんとという悲惨で荘嚴な反戦の投げかけであるかと思う。

昭和二十年から三十年代にかけて戦争を題材にした映画は数多く作られたが、創る側の思惑によつて中身がデコレーションされる。人間の条件などはどちらかというところがかつており、鶴田浩二と木村功演じる「雲ながるる果てに」は特攻隊で散つていく若者を描いているのだが、反戦のほかに訴えるものがあるように感じる。そうはいつても、教育もそうであるが、与える側の影響もあるが、受け止める側の者のとり方にも左右されるのではないか。

さて、私が成人した後で読んだ読売新聞大阪社会部編集の「新聞記者が語りつぐ戦争」というシリーズをご紹介します。文庫本で八巻から成り、戦争体験をした人に新聞記者がインタビューをし、現地に取材したドキュメンタリーである。第一巻は「空襲」を題材にし、大阪環状線京橋と森ノ宮の間にある砲兵工廠跡地で空爆にあった人達の体験談である。当時、市岡高女の女学生が挺身隊で働いており、多くの教師や学生が犠牲になった。実は私の叔母は三人とも市岡高女の出

